

# 2015年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	高山市立東小学校	氏名	山田 真沙美
-----	----------	----	--------

## 1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

### (特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は、今回の研修に2つの目的をもって参加した。自分が開発途上国の現状を知り、生活や文化、価値観の違いに触れて自分の視野を広げるということ。二つ目は、英語が苦手な自分でも、主体的に関わる気持ちを大切に現地の人々と交流するということであった。特に、ガーナの学校交流の時間では言葉がうまく通じず、なんて説明すればよいのか戸惑う場面に多く遭遇した。しかし、片言の単語と、ジェスチャーと気持ちを全身で表現していくことで、現地の子ども達と気持ちが通じ合えたことが今回の現地研修の中で印象深く残った。なぜ、気持ちが通じ合えたのか。それは、お互いが互いの考えを受け止め、知ろうと歩み寄り、相手を大切に思っ接し合えたからこそではないかと私は考えた。この経験を日本の子ども達にも伝えたと共に実感させたい。そこで授業実践では「知ろう」をキーワードに他者の多様性を受け止めるワークを取り入れて他者を知り、お互いが関わり合う楽しさを感じられる実践を行いたいと思う。そして、自分から主体的に他者に関わろうとする姿勢を育てていきたいと思う。

## 2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

### (1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

私がガーナに来て一番に思ったことは、人々の関わり合いがとても多いということである。ガーナの人々はとても優しく、親切で親しみやすい人々だった。あいさつはもちろんであるが、相手のことを知ろう、大切にしよう、喜んでもらおうという気持ちが感じられた。What is it saying in your country? と尋ねてくれたり、自分たちの生活を紹介してくれたりとても積極的。また、子どもも大人の姿を見て手伝おうと自分から動く姿が多く見られる。そして、ガーナの人々は家族をととても大切にしている。家族構成も大家族で昔の日本のようだった。生活の面で不憫さがもたらあるが、その不憫さをみんなで協力し合って乗り越えている。だからこそ、人々の中で困っている人がいれば助けあう気持ちが育ち、人々のコミュニティが発達していくのではないかと考えた。さらに、働き手の中には女性も多く、子どもを背負いながら働く姿に、女性のパワーと社会の理解を感じた。

### (2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

現地につくと、たくさん日本車が走っていることに驚いた。日本はよくわからないけど、トヨタは知っているという話に物でのつながりは多くあるように思った。その証拠に、企業の広告を目にすることも多く、自分たちが思っていた以上に多くの一般企業の参入があることに気付いた。これは、企業の参入に限らず、支援に関しても同じことが言える。野口医学研究所では、人々の健康を守りたい、人の役に立ちたいという思いで研究を続け、仕事に対して誇りを感じている現地研究員に会うことができた。そして今、現地の人々が研究リーダーとしてプロジェクトを動かしている。これは、現地の人々の思いを大切にしながら日本も人々の健康を守るという同じ立場に立って、継続的な物資支援、技術支援を行った結果、ガーナの研究員の自立支援につながったのだと思う。そして今、同じ願いをもち、共に歩むパートナーとしての関係を築くことにつながったのだと思った。

### (3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

今回訪問して思ったことは、日本もガーナも互いに補い合う必要のある国であるということである。日本は技術があるけど資源がない。ガーナは資源があるけど技術がない。互いに完全な国ではなく、互いに補い合い、支え合い、共に歩むことでお互いが成長できるパートナーシップ関係を築いていくことがよりよい未来を共に築くことにつながっていくと考えられた。日本が行う技術支援は人に、その国に残る支援であり、その技術によって現地の人々は国を発展させ、持続可能な社会を作り出していくことができる。さらに、ガーナから資源の提供を受けて日本はガーナと共に技術開発を行うことで、自国の産業が発展すると共にその分野において貢献することができる。互いに利益があり、自国のレベルアップにつながる支援で補い合うことが強力なパートナーシップ関係の確立につながり、共に課題を乗り越えていけるのだと思った。

### 3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

今回、訪問した中で支援・援助の在り方について大きく考えさせられた。JICAはその国の要請を受けて国際協力事業に取り組んでいる。協力することは与えることに近いと思ったが、今回関わった方々は、その国の人々が自分たちの力で持続可能な社会を作り出していくことを目指した支援をしていた。それは現地の人々のことを理解し、適切な支援の段階を考え、タイミングよく、与えすぎない協力支援を行うということであった。特にJICAは技術支援に継続的に取り組んでいた。物は時間が経てばなくなるが、技術は残る支援。とても意義のある協力事業であると思った。互いの国が互いを支え合える、目指すは対等に共に歩むパートナー。かつての日本人が一生懸命に関わってきたからこそ、外国と日本との関係も友好となり、現地の人々は私達を好意的に受け入れてくれるのだと思う。今後あるといいと思う視点は、日本の世界への支援をもっと人々に知らせるということ。そして、教育の分野でも技術研修交流をもっと日本でも行えると、現地の現場の支援にもつながるのではないかと思った。

### 4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

### 5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [AOS\_0132]

◇キャプション：さよなら、そしてありがとう

◇解説文：日本でもよくやるのですが、言葉だけよりもなぜか心が通じ合う気がします。ここでも温かい気持ちでさようならができました。



## ●写真2… [DOK\_3753]

◇キャプション：子どもために、未来のために

◇解説文：日本とガーナの教員が共に教育について考える。教具がなかったら…、親の理解が得られなかったら…、共に知恵を出し合い、語り合い、考える機会が増え、改善されることを願って。



## 6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

今回参加する中で一番心配していたのは虫に刺されることと体調を崩すことでした。しかし、虫よけをし、携帯用のベープや手首につけるリング、長袖を心がけていたらほとんど刺されることはありませんでした。部屋でも、電池式のどこでもベープを使用していましたが、半そででも問題なく過ごすことができました。体調も多少お腹の緩みを感じることはあっても問題なく過ごせました。準備では、学校の先生方との交流の際に自分の学校の様子を見せられるように写真を準備して持っていました。写真にある教具について、「もし、これかかなかったら、あなたはどう教えるのか。」といった具体的な指導法の交流の話などもできました。先生方も日本の教育現場について関心が高そうだったので、ぜひ、準備されていくことをお勧めします。そして、見学の際のすき間の時間、移動時間はチャンスがたくさんあります。何気なく話している間に自分が気付かなかった視点に出会い、協力隊の方から貴重なお話が聞けます。疲れて寝ちゃうことももちろんありますが、現場の方々の貴重な考えにぜひたくさん出会っていただきたいと思います。

## 7. その他全般を通じての感想・意見など

今回研修を通して、支援の在り方について深く考える機会をいただけた。それは、自分達で継続的に国を発展していけるような支援が必要だということである。その支援の在り方とは現地の実態把握をして、現地の願いを知り共有していくこと。そのうえで、必要な物資、技術の支援を適切なタイミングで段階的に行っていくことが大切だということを知った。国が発展するためには人への継続的な技術支援が必要であり、それはつまり人を育てる教育そのものである。支援の在り方と教育の手立ての打ち方が非常によく似ていると思うのは、開発支援も、教育も、人々が持つ力を十分に引き出し、自分たちの力で継続的に発展していく力を育てるという人に起因しているからであると思った。研修の中で、「開発とは、国が持っている力を外に出すということ。教育とは、人が持っている力を外に出すということ」というお話をいただいた。国の発展には両方の支援が不可欠である。私達のこれからの役割としては、ガーナという国について知ってもらい、現地で活躍する人々の思いや支援の在り方を伝え、広めていくこと。そして、自国のことだけでなく、他国について関心を持ち、自分たちの力で解決し、発展していこうとする子ども達を育てていくことではないかと思う。

以上